厄介な人

ウィッテノス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
厄介な人

【Ｎコード】
Ｎ１０７０Ｎ

【作者名】
ウィッテノス

【あらすじ】
自分が経営する書店に雇ったバイトに付き纏う、嫌な噂。事の真偽を問いただしながら、真相が分かった後で、主人公がどう対応するかに主眼を置いた小説です。むかしに始めて書いた小説です。

深夜、時計の針の歩みが遅い。何度も目をやっても、大して時間は経過していなかった。
もう、深夜二時の感覚なのに、まだ、時計は夜の１１時を差していて、まだ、あたりに人の気配があった。
この時間帯ならまだマシなのがやっているだろうから、リモコンを取って気だるくテレビをつけた。
つけること自体に、暇つぶしの意味も、楽しむ意味も無い。ただ、人の声が欲しいだけで、まだ、眠りは訪れそうに無かった。
ソファに横になり、瞼を閉じると、どっと疲れが両肩に圧し掛かってきた。
アナウンサーの低いトーンが、ニュースの内容を告げているのを、ただ何となく聞いていた。

「店長」

声をかけられて目を僅かに開ける。
バイトの子が、扉の前で立っていた。

「レジ確認終わりました」

「ああ、もう帰って良いよ」

しかし彼女は、帰ろうとせずに扉の前で黙って立っていた。

「何だ」声をかけると、動きを忘れていたかのように立ち位置を変えた。

「他に、手伝える事はありませんか？　もっと働いていたいんです」
「今日はもうない。また明日な」
「いえ、でも……」
「何だ、金に困ってるのか？」
「いえ、違うんです。あの、家に帰りたくなくて」
「なぜ」
「近頃、おかしな男につけまわされているんです。それで、ちょっと怖くて……」
額に手を当てる。眉間に皺が寄っているのが感触で分かった。意図てきにじゃない。意図的かもしれないが、そこまで意識はしたつもりは無い。
大きく息を吐きそうになるのを堪えた。
どう答えるべきか、どうしたら良いか、返答に困るような話だった。
「警察には？」
「話しました。でも何かあったら通報してとしか言ってくれないんです」そりゃそうだろう、と、思わず思った。そんな話をされても警察だって困る。
「しかしだからもっと働きたいと言ってもいつまでもここにいるわけにはいかないだろ。

実家や友人の家や、彼氏がいるなら彼氏に付き添ってもらうとか、ホテルに泊まるとか、そういうことしか私には思いつかない」

「分かってます。実は働きたいと言ったのは口実で店長に相談したかっただけなんです」

そう言って彼女は言葉を切ってしまった。でも、帰る素振りはなかった。

「今夜のホテル代ぐらいなら出すから……」仕方なく、言い方は悪いが、追い出したくて、あまり乗り気になれない提案を出した。

「いえ！　いいんです。ただ……いえ、やはり帰ります」彼女は言葉を切って、少し表情に陰を作った。

「ああ、じゃあまた明日」それを気せず、私は別れを返した。

「すみません、失礼します」

扉が閉まると遠慮なく息を吐いて、瞼を閉じる。
本当に疲れていて、同情的になる気持ちも親身に思う気持ちも湧き上がらなかった。とにかくもう、面倒なことは避けたかった。
今日はもう全て切り捨てて、眠りたいと思った。

眠りから目覚めると、昨日の疲れは幾ばくか取れていた。
布団を床に落として立ち上がると、眠気も無く比較的良い目覚めであると実感した。

「よく寝ていましたね、いびきが聞こえてきましたよ」

階下に下りるとバイトの子が本の整理をしているところだった。

この子には家の鍵を渡してあるから、私が準備を始める前から家に来ている事がしょっちゅうあった。

そのバイトの子の顔を見て、気になることを思い出したので尋ねた。

「ああ、もう来てたのか。昨日はどうした？」

「友人の家に泊まりました。明美です。あの、今日は従弟を手伝いとして連れてきたんですが、お金はいりませんので、社会経験の一環として今日だけ手伝わせても良いですか？」

「急な話だな。まぁ良いけれど。いつ頃来るんだ？」

「あの、もう来ちゃってます。いまトイレに行ってます。もうすぐ出てくると思います」

それを聞きつつ、顔は時計の方に向けていた。

八時半。

まだ開店までには余裕があって、この朝の内に用事を済ませることが出来そうだった。

そこでバイトの子に言う。

「トイレから出たら二階を自由に使って良いと言ってくれ。私はちょっと出かけなければならない。

開店の準備と店番を頼む」

「あっ、店長！　挨拶させますから！」

「帰ってから挨拶ということにして欲しい。じゃあ、店番よろしく頼む」

そう言って、二階から持ち出していたコートとハットを被って外に出た。

「それで、どうだ、営業の方は」

幼馴染の川田が相変わらずの気難しい顔でコーヒーをすすりながらそう話しかけてきた。

「良くないね。近場の営業所が潰れてコストが高くなった。同業者も不況で次々と撤退しているし、最悪だよ、いまは」

「なら無理に続ける必要はないじゃないか。近頃の再開発で営業許可の取り消しが進んでる中で、お前の所だけ残ってるのは不自然だって声も上がってるんだよ。
当面を凌ぐ金ならあるんだろ？　あの店を売って、アパートにでも越せば新しい道も見えてくるじゃないか」

「それが出来ないからお前に頼んでるんだ。色々事情があるんだ」

川田はため息をつく。

「まぁ、とにかく、営業停止にならないよう取り合ってみるが保障は出来んぞ。

あの書店が残るなんて期待はするなよ。ただ閉店した時なるべく良い条件で保障が受けられるように頼んでみるから」

「……」

「そんな気難しい顔をするな。努力はしてみる」川田はそう言って酒をついできた。

「……ああ」

「それから、ちょっと気になる情報が耳に入ったんだ。明美がつい最近この町に戻ってきたのを知ってるか？」

「ああ、この前会った。突然喫茶店に誘われて、その時に知り合いをバイトに雇って欲しいと頼まれた」

「……そうか。ちょっと気になってることがあるんだ。海外留学で反体制派に転向するケースは良く見られるからな。明美がそうだという確証は無いんだが……一応お前も気をつけて欲しい」

「気をつけるって？」

「明美、公安から調査の対象になってるらしい。もし、明美が反体制派のメンバーでお前と親しくしてたら営業停止どころじゃすまんぜ。その知り合いの子だって分からんぞ。帰国して早々お前に会っていきなりそいつを雇ってくれって言ってきたんだろ？何か理由がありそうじゃないか」

「推測だろ？　分からない事をいまあーだこーだ言っても仕方ない。何か分かってから話して欲しいね。
それじゃあ用が済んだから帰るよ。ごちそうさん」
すると川田は真剣な顔でこちらを見た。
「割と、信憑性のある話なんだ。いまこちらでも色々と調べている。念のため気をつけてくれ」
はいはいと軽く返事をしつつも、嫌な疑念が涌いてくるのが感じられるのだった。

昼になって店に戻ると、店内に客の姿は無く、バイトの子と、学生服を着た青年がレジに座っていた。
従弟は確か、高校生だとむかしバイトの子から聞いているが、今の子供にしては大人びた、穏やかな顔をしていた。
「あ、お帰りなさい。この子が今朝話をした従弟です」
「始めまして、今日はよろしくお願いします」礼儀正しく深々と頭を青年は頭を下げた。
「君が従弟君か。社会勉強といっても、何か教えてやれるわけじゃないから、お姉さんに仕事のやり方を教えてもらって、自由にやって構わないから」
言い方が多少悪いかなと思いつつも、これが自分の性格だから、言いつくろうのは諦めた。

「はい、頑張ってお手伝いさせていただきます」と不快に思った様子も無く言葉を返してくる。

「ところで、君、松崎さんは来たか？」と私はバイトの子に話を向けた。

バイトの子はそれにちょっと不快そうな顔をした。

「店長、私の名前は島田です。覚えてください」ああ、確かにそれは失礼だったと納得する。

……どうも、人の名前を覚えるのが苦手だ。

「……ああ、島田さん、松崎さんは来たか？」

「ええ、本の納入は来週になるって言ってました。申し訳ないって謝ってましたけど」

「……そうか。後で電話をしておこう」独り言じみた呟きを言って、二階に上ろうとすると、島田さんが後ろから声をかけてきた。

「ところで店長はどこへ行って来たんですか？」

「幼馴染と会ってきた」

「仕事をバイトに任せてですか？」

「嫌味か？」

「いえ、スキンシップです。軽口も必要だと思って」

「……仕事の話をしてきたんだよ。それなら文句ないだろ？　じゃあよろしく」

「店長、せっかくお客さんもいないですしお茶でも飲みませんか？　この子も店長と話したがってるし」

緩んだ発言に嫌味の一つも言いたくなったが、従弟がいる前で恥をかかせるのもあれだと思い、言葉を飲み込んだ。
彼女がいつもより明るいのも、積極的に話しかけてくるのも、従弟の影響だと思ったからだ。

「茶なんて家にはないぞ」

「良いんです。お茶は口実で話がしたいだけですから。座ってください」

いつもなら突っぱねるのだが、彼女は良く働いているから玉には付き合うことにした。

「話と言っても、話題があるかな」

「じゃあ店長の事教えてください。いつも話す機会がないから」

「例えば？」というと、彼女も困ったように考える。

「例えば、両親の事とか」と、出てきたのが当たり障りの無い、面白みも無い質問だった。

「生きてるよ。交流がないだけで。私も質問がある。明美と君はいつ知り合ったんだ？」

「留学先の大学で知り合ったんです。お互い留学組みで仲良くなって。店長の事は明美さんから聞いてました」

「倉木さんは、彼女はいないんですか？」従弟がそう聞いてきた。

「ああ、いない。必要だとも思わない」少し恥ずかしさはあったが、事実そう思ってるからそう答えた。

「でも店長ももう良い年ですよね。もうすぐ三十台でしょう？　そろそろ相手を見つけた方が……」

「どこから聞いた話だそれは。私はまだ二十四だ」

「え？　あ、いや、おかしいな。そんな話を聞いたと思ったんですけど。じゃあ私とそう変わらないんですね。なんだ」

「どういう意味のなんだだそれは。そうだ、そういえば私も聞きたい事があった。
今日幼馴染が言ってたんだが、明美は……反体制派と繋がりがあるっていう噂が立ってるらしい」

「え？　何ですかその話」

「何でも明美が公安に目をつけられてるらしいんだ。その事事態は事実らしい。で、それについて何か知ってることはないか？」

「そんな、出鱈目です、そんなの。その人がどんな人かは知りませ

んけど、本当の話だとは思えないです」

「そうか。ついでに君も疑われてるみたいだが」

「そんな……いい加減な話です！　店長はそんな話を信じてるんですか？」

「分からない。確証はないし、推測に過ぎないから。だから聞いてみようと思ったんだ」

「そんな、疑われるなんて、気分が悪いです」

「そうか、悪かった。今のは忘れてくれ。さて、私はそろそろ仕事に戻るよ。レジをよろしく頼む」

「待ってください。その話、どのくらい広まってるんですか？」

「広まってる？　ああ、町で流れてる類の噂じゃないよ。その幼馴染はこの地方の議員で、明美が公安に見張られてるって知って、明美や君が反体制派なんじゃないかって思ったんだろう」

「そうですか……。公安の人がなんで明美さんを見張ってるのかは分かりませんが、絶対に間違いです。その議員の人に言っておいてください。貴方の失礼な思い込みだって」

「ちゃんと伝えとく」

「貴方の思い込みだだって」

「ははは……まぁそう言うだろうね。当たってたとしても」
「おや、君はだいぶ自信があるみたいだね、自分の推測を」
「ああ、というよりもう確信してるんだ。
資料を貰って自分で調べたけれど、明美が反体制派と関わってるのはほぼ間違いない」
「関わってるっていうと？」
「明美の今までの足取りを調べたけれど、反体制派のメンバーと会ったという事実は無い。
ただ、あいつが滞在した場所には反体制派のメンバーが滞在するケースも多い。
偶然とは思えない」
「もし本当にそうなら、捜査する人間がとっくに気づいてるだろ」
「明美はそれほど重点的に捜査の対象になってないし、もしそうだとしてもみなさして重要じゃないからそんなに注目してないのさ。
もうすぐ反体制派の一斉検挙がある。　そんな細々した捜査をしなくても幹部を捕まえてメンバーを吐かせれば芋づる式で捕まると捜査の連中は思ってる。
でも俺にとっては明美は幼馴染だし、もしそうなら何とか助けてやりたい。
検挙が始まる前に」
「助けるって？」

「説得する。証拠を見つけて、あいつに突き出せば認めるだろう。反体制派は検挙されれば一生収容所か死刑だ。あいつだってそうはなりたくないはず。うちの警察の恐ろしさはみんな知ってるからな」

「……」

「お前も、バイトの子を追い出した方が良い。明美とももう関わるな。お前が疑われても俺が説得するが、これ以上関わってたらまずい」

「そうだな、重々考えとくよ。じゃ、毎度ご馳走様」

「おい、これは真面目な話なんだ。　本当に雲行きが怪しくなってるんだぞ」

「分かってる。ありがとう。じゃあな」

川田は何か言おうとしたが、無視して喫茶店を出た。

帰りに、わざと駅から歩いて帰ったのに、考えが途中の間に、書店についてしまった。

結局、どう考えても結論は出なかった。

「おかえりなさい」レジで退屈そうに座っている島田さんが、気楽な感じで挨拶をしてくる。

「ああ」とだけ答えて、二階に上ろうとしたが、やっぱりなんだかもやもやして、気が散って仕方ないので、途中で戻って島田さんに

話しかけた。
「今日幼馴染にまた会ってきたよ。君のメッセージもちゃんと伝えてきた」
「ああ、伝えちゃったんですか？　ちょっと昨日は怒ってて強く言い過ぎたなって反省してたんです」と苦笑いするのが、胸が痛んだ。
「気にするなよ。あいつの方が傷つく事を言っていたから。明美は反体制派に間違いないってさ」
「……え？」
「もう確信してるらしい。証拠を掴んで説得させるって言ってたな」
「……じゃあ、貴方は私を、」
「分からない。って、昨日言ったろ。だから困ってるのさ。だから、君の話を聞きたいと思ってね」
「私は……」島田さんは黙ってしまった。少しまた、良心が痛んだ。
「悪い、最初から疑ってかかってしまった」
島田さんが首を振る。
「良いんです……店長、もし私が反体制派の人間だったらどうします？」
「何を言ってるんだ……？」
「もしもの話です」そう言って彼女は私の目をじっと見た。
「その時は当然出て行って貰う」
「そうですよね、もちろん、冗談です。反体制派のわけがないです」
彼女の、言動の意図が良く分からず、「じゃあ、僕は二階で仕事するから」と言って階段を再び上った。
しかし階段を上りながら、徐々に確信が募っていった。
根拠は唯の勘。彼女の、私を試すような目は真剣で、真面目だった。
そんなことはあって欲しくないと思いながらも、認識は徐々に疑念に染まっていった。

今日も、川田にあっていた。

川田もさすがにうんざりした様子だったが、それでも会ってくれるのはありがたかった。
「どうしたんだ？　ここ最近毎日のように会いに来てるじゃないか」
「……」私はすぐには言葉が出なかった。
「おい、どうした。何か言いたい事があるのか？」
「恐らく、バイトの子も反体制派だ。これは勘だが、確信がある」
「ほう、その根拠は？」
「根拠は無いけど、私の勘は良くあたるほうだ」
「ふん、まぁ実際に暮らしてておかしな言動があったりしたんだろ。信じるよ。で？」
「彼女達を調べて欲しい。それで、もし出来るなら明美のついでに彼女達も助けてやってくれ」
「無茶を言うな。僕は警察じゃないんだ。大体本人達が認めてないのにどうやって説得して逃がすんだ？
不可能だ」
「……そうか。なら良い」と行って席を立とうとすると、川田が慌てて言う。
「待て。どうせ自分で調べてどうにかしようとしてるんだろ。だが辞めろ。
相手も命がかかってるんだ、死に物狂いな行動を取るぞ。
お前は警察でもなければ僕のような後ろ盾もない。
勝手な行動はするな」
「分かってるよ。いざとなれば追い出すさ。じゃあな」

次に取るべき行動が分からなかった。
僕の確信の根拠は勘だった。
それで追い出すのは道理としておかしい。もう少し何か分かるまで、自分自身も何も行動が取れなかった。
「ああ、気分が悪い」真相が分からないまま人を疑うのは本当に気

分が悪い。
そう独り言を言いながら、書店にまた結論が出ないままついてしまった。

「おかえりなさい」「ああ」「また幼馴染のところですか」「ああ」
「そうですか……」
二階にあがろうとしたが、何か胸の内側がむず痒くなる様な感覚を覚えて、踵を返した。
「もう限界だ、うやむやしてて気分が悪い。明日明美に会わせてくれ。直接聞く」
「明美さんに？　……確かに、その方が良いかもしれませんね」
「すまんが、頼む」と私が言うと、島田さんは頷いて電話のところまで行って受話器を取った。

「明美さんですか？　あの……ええ、分かってます。でも、倉木さんが貴方に会いたいって……」
「貸してくれ」と、受話器を渡してもらう。
（会いたいって、どうして？　何かあったの？）
「ああ、あったよ。いま私はお前が反体制派なんじゃないかと疑ってるんだ」
（柳也……？　反体制派って……？）
「その話を明日したい。会えるかな？」
（そんなこと突然言われても困るよ。私だって仕事があるんだから）
「そんなこと言ってる場合じゃないと思うがな。県議会の議員の一人がお前を疑ってる。
お前の反論が聞きたい」
「議員って、川田ね。あいつ……。とにかく明日は会えない。そもそも疑ってる根拠はなによ」
「公安がお前を反体制派だと踏んで捜査してる事が大本の根拠だけど、後は勘と推測だ」

「公安警察が私を？　馬鹿言わないでよ、なんで私を」
「何か、理由がなきゃ捜査などされるはずがない」
「私を疑ってるの？　幼馴染の私を？」
「私だって疑いたくない！　だから明日会ってこんなくだらない問題はさっさと終わりにしたいんだ！」
「な、何で怒るのよ。勝手に疑ってるくせに…」
「……悪い、この問題の事でいらいらしてるんだ。とにかく、明日家に来てくれ。悪かった」
（分かったよ。明日会って話をしましょう）
受話器を下ろすと、隣で島田さんがきまづそうな顔でこちらを見てるのに気づいた。
「明日で最後だ。違うと思ったらもう二度とこの事は口にしない」
「……はい。あの、明日私も一緒に明美さんと会います。だから明日同席させてください」
「構わないよ。じゃあ、仕事、よろしく頼む。私はやることがあるから」
そう言って、二階に上がった。
二階のリビングに入ると、従弟が座っていた。こちらを見ているが、話をする気も無く自室に入ろうとした。
「……倉木さん、姉さんは反体制派の人間なんです」流石に足を止めて振り返った。
「俺も最近知ったんです。俺達家族にも公安の職員が付きまとってきて、姉さんに理由を問いただした時に。
姉さんがここで働いてるのは、貴方が川田議員と友達だから、貴方といる間は公安の人も寄り付かなくなるって説明してた。
……姉さんがなんで反体制派になんかなったのか、何を考えてるのか、本当によく分からないんです。俺には理解できない」
「……私もどことなく察してはいた。きっと理由があるんだ。あまり悪く言うな」意外にすんなりと受け入れられて、受け入れた時もっと意外と、怒気は涌かなかった。

学生は意外そうな顔をした。
「貴方は、怒ってないんですか？」
「どうだろうな。いまは疲れてて自分の感情が分からない。と言うわけだから、寝るよ」
部屋に入り、扉を閉めてから思い立って再び扉を開けた。
「心配するな。君は僕が責任持って預かるし潔白も証明する。まぁ僕も捕まる落ちもあるがね」
「本当にすみません……」
「気にするな。不幸はお互い様だ。おやすみ」
扉を閉めてすぐにベッドに横になったが、すぐには寝られなかった。まどろみながらも、結局明け方までここ連日の出来事を考えていた。

朝、島田さんに起された。
いつも自室には入るなと言っているのに。
「明美さんが下で待ってます。怒ってますよ。呼び出しておいて何だって」
「……ああ、コーヒーでも飲んで一時間ほど待ってくれと言ってくれ」もう、話をする必要はなくなっていた。
昨日の学生の話で真相は分かっていたから。
「ふざけてる場合じゃないですよ。帰ってしまうかもしれませんよ」
「……ああ、そうだな」そう言って体を起す。もう少しこの小芝居に付き合わなければならない。
とても、具合が悪くなった。
下に下りると、いかにも不愉快そうな顔の明美が待っていた。
「ちょっと、酷いんじゃない？　私は会社まで休んできたのに」
「悪い。昨日は明け方まで考え事をしてたんだ。まぁせっかく来たんだ。水でも飲め」
「コーヒー」

「本当に水しかないんだよ。で、早速聞きたいんだが君は反体制派か？」
「何それ？　普通いきなりそんなこと聞く？　川田と柳也が何を考えてるのか分からないけど、違うわよ」
僕は表情を真顔に変えて明美を見た。
「言い逃れは友情に傷をつけるだけだぞ？　えっ？　最後のチャンスだ。本当のことを言え」
座ったままの明美の目を見つめて言い放つ。
「だから、本当に、」
「昨日島田さんの従弟に聞いたよ。島田さんが反体制派だって。残念だ。もう帰って良い。二人ともな」
明美が驚いて島田さんを見る。島田さんは俯いたままだった。
僕がそれを無視して二階に上がろうとすると、明美が声を張り上げた。
「ちょ、ちょっと待ってよ！　島田さんが反体制ってどういうこと？　何の事だか、」
「一人で逃げる気か？」
明美が絶句したように言葉を失う。それを見て失望感が胸に過ぎった。
「店長、違うんです。明美さんは反体制じゃありません。入ってるのは、私だけです」
「とても信じられんな。信じて欲しいなら僕が納得できるような説明をしろ。ただ違うと言われてもいままで騙されてたから鵜呑みに出来ない」
「貴方を納得させるような説明は、出来ません……。けれど、私のことで明美さんに迷惑をかけたくないんです。
これだけは信じて下さい……」
言葉が尻すぼみになる。気づかないうちに自然に厳しくなっていた視線を島田さんに向けた。
「……分かった。それは信じておく。で、君はこれからどうするん

だ？」
「私は……まだ捕まる事は出来ません……。だから……」
言葉に詰まったようで黙ってしまった。しかし何となく、言おうとした事は分かった。
「通報はしない。逃げたいなら好きにすれば良い。従弟も家で預かっておく。警察には僕から言っておく。ただし君の事も全部喋るがな」
「それで構いません。ご迷惑をおかけしました……」深々と頭を下げた。
だいぶ打ちのめされているようで、これ以上かける言葉も見つからなかった。
「捕まるなよ」それだけ言って二階に上がった。その後から明美もついてきた。
部屋に入ると明美が憔悴しきった様子でうろちょろと歩き回り、僕はそれを諌めて経緯を説明した。

数日後、島田さんから手紙が届いた。住所が書かれているが、恐らく偽の住所だろう。
手紙には川田の事が書かれていた。
だから、次の日、僕は川田と会った。
「どうした、今日はずいぶん怖い顔をしてるな。元々顔が凶暴なんだからそういう表情をするな」
「……明美は違ったよ」
「直に聞いたのか？　だとしても信じられないな」
「……お前、嘘をついただろう」
「嘘？　どんな？」川田はあざ笑うように嗤った。その反応で確信した。
「お前は明美が反体制じゃないと分かってただろう。その上で俺に

あの話をした」
「なぜ俺がそんな嘘をつく必要がある？」心底おかしそうに嗤うが、挑発に乗らないように目を逸らした。
「お前は裏では反体制派に対して強硬な立場をとってるらしいな。そのお前が幼馴染とは言え反体制派と繋がりのあるやつを、説得して逃がすわけがない。
そこが疑問点の一つ。俺も質問させて欲しい。一体なぜ、それを隠す必要があったんだ？　何か理由がありそうじゃないか」
私は逆に川田を挑発するように笑った。川田は真顔に戻る。
「待て待て。誤解だ。いや、どうやら俺もお前もお互いに誤解しているようだ。
俺はお前も反体制だと思ってたんだ。
この町に反体制の支部があるのは間違いないんだ。なのに難航している。
百人規模の潜伏した捜査官が捜査にあたっているにも関わらずだ」
「詳しく、事情を説明してくれないか」
「この前別の県警で反体制を支持してる団体の強制捜査が入ったんだ。
押収した資料の中にその団体の幹部者名簿があった。
お前の両親の名前が書かれていたよ、そこに」
「……」
「俺は君を唯一の友人と信じて付き合ってきたんだ。本当の事を話してくれ」
「……倉木という名は、金で買ったんだ。
兄も、両親も、元は何者かは聞いた事がない。
全員他人で、ある日突然家族になった。彼等が何をやってようが私とは関係ない。
別に珍しい事じゃない。そういうビジネスがあるんだ」
「そうか……疑惑については、今日のお前の反応で違うと確信した

し、実際おまえ自身が反体制派である証拠は出てこなかった。
だから、もうお前は俺の捜査とは何の関係も無い。
だが友人として知りたい。お前は何者だ？」
「ただの戦災孤児だ。私は運が良いほうで、闇市で成功できた。だから名前も戸籍も買えたんだ」
「戦災孤児というのは嘘だな。お前ぐらいの年で、親がいないならあの時代なら兵士として動員されていたはずだ。
お前、戦争に参加してたろう？」
「ああ」
「少年兵というのはこの国の暗部だ。俺が聞きたいのは実はそこで、お前達少年兵が何をやってたのか興味がある。教えてくれないか」
「おいおい、ファンタジーに浸るな。君らしくも無い。お前が目を輝かすような秘密なんてないよ」
「秘密ってのは知るまで価値が分からないだろう？　教えてくれよ」
「本当に、華々しい過去なんてないよ」
「もったいぶるな、言えよ」
「自爆兵だよ」
「……」
「川田、俺も友人として頼みがある。一人、助けたいやつがいるんだ。反体制派の中に。そいつだけ、目を瞑ってくれないかな」
「馬鹿言うな……それとこれとは違う」
「情報を教えてくれるだけでいいんだ。頼むよ」
「……」

書店に戻ってきた。
扉を開けると、青年がレジの前で黙って座っていた。
「倉木さん……おかえりなさい」

「ああ。しばらく、書店は君に任せる。私は当分の間戻らないかもしれない」
「何か……あったんですか？」
「何も無い。君が不安に思うような事は。私が帰ってくるまで書店は任せた。じゃあな」
帽子を取って外に出ようとすると、青年が追いかけてきた。
「待ってください！　一体どうしたんです」
「君の姉さんが心配だ。連れ戻してくる」
「……え？　じゃ、じゃあ、俺も」
「良いから、ここは大人に任せなさい。話し合いをしてくるだけだから問題ないが、何かあったら川田議員を頼りなさい。信頼できる男だ。きっと面倒を見てくれる」
そう言って歩き出した。

島田さんの自宅に寄ってみたが、既に引き払った後だった。別のところに転居したのだろうか。非常に困った。
川田によれば、西宮ビル二階で十月二十日に会合があり、そこで検挙に乗り出すらしいが、事前に幹部の名前を教えてもらった。非常に気乗りしないが、方法は一つしかなかった。
僕は、その幹部の自宅に向かった。

インターホンを鳴らすと、応答があった。
「どちらさまでしょうか」
「貴方の同士を匿っていた者です。そのことについてぜひお話がしたくて」
「……そのお話の内容とは？」
「ぜひ、中でお話がしたい。貴方も他人に聞かれては困るでしょう

？」
しばらく、息を呑むような気配が伝わり、やがてインターホンが切れた。
扉が開く。
と同時に中に引きづりこまれ、壁に押し付けられたと思うと銃を頭の横に荒々しく押し付けられた。
「用件は何だ？　お前は何者だ？　なぜここが分かった！」
廊下の奥には更に数人の男がこちらを睨んでいた。
それだけで、彼等が素人だと分かった。
腕を組む余裕なんか見せずに、不測の事態のために銃を構えておくのが常道というものだ。
相手が何者でどんな用件でどんなものを持ってるかも分からないなら尚更だ。仲間だっているかもしれない。
だけど私はなるべく挑発しないように言った。
「落ち着きなさい。私は君達の敵ではない。私は貝和書店の店長で、君達の同士を匿っていたのだ」
「なぜそいつが俺達の同士だと分かる。あっ！？」威嚇するように声を張り上げた。
必要以上に興奮している。激し易い性格なのか、それとも恐れているのか、こんなときに無用な分析をした。
「もちろん君達の同士から聞いた。。
島田と言う苗字だった。偽名かもしれんがね。
この町に潜伏してる反体制のメンバーは少ないはずだ。
知らないかな？　貝和書店で働いていて、従弟の……浩二君と一緒に暮らしていた子だ」
男達は顔を見合わせる。
その時に気づいたが、全員だいぶ若かった。
「……知っている。島田は本名だ。あんたを信じるよ」そう言って男は銃をズボンの間に挟んだ。
居間に連れられて、ソファに座る。

「それで、あんたの用件は何だ？」
「話がある。重要な話だ。警察の捜査について、よからぬ噂を聞いた」
「何だ、それは」男達が身を乗り出す。
「話すには、条件がある。島田さんの居場所を教えて欲しい」
「本当に重要な話なのか？　まずは内容を聞いてからだ」
「僕の友人は県議会議員の一人だ。
本人から聞いた。私は彼から口外しない事を条件にその情報を聞いた。
聞いた理由は島田さんを助けるためだ。
これでも不満か？」
男達はしばらく無言だったが、やがて幹部が口を開いた。
「良いだろう。島田は西新井ビル四階に同士と共に隠れている。
ではお前の番だ。情報を教えろ」
「それは出来ない」
「何だと？」
「友人の手前最低限彼の捜査に支障が出ない範囲で教えなければならない。
だから教えるのは今じゃない。
適切な時期がきたらそれとなく僕が注意を促す」
幹部が銃を取り出す。
「ふざけるな！　さっさと言わねぇと撃ち殺すぞ。こっちは常に命がかかってんだ。遊びじゃねぇんだ！」
「命がかかってるなら銃をしまいなさい。その命を助ける方法は僕しかしらない」
「この野郎……！　無理やり口を割らせてやろうか？　あっ！？」
「私が情報を知ってる段階で、拘束されれば情報が漏れるのを恐れて警察が動く。
ここの警察の恐ろしさは知ってるだろう？」
「それほど重要な情報だってか？　はったりだ！」そう言いながら、

幹部は顔を怒りに歪めて睨みつけるが、やがて諦めたように銃をしまった。
「では、話は終わりだな。帰らせてもらうよ。心配するな、ちゃんと直前で電話する。
僕と同世代の若者を死なすのは、心苦しいからな」
そう言ってアパートを出て行った。
去り際、彼が舌打ちするのが聞こえた。

帰り道、そのまま電車で西新井ビルに向かった。
西新井ビルは、郊外の開発の遅れた、取り残された地域にあった。
ガラの悪い住民が住む郊外で、一人だけ正装にハットを被った僕は浮いていた。
絡まれないようにサングラスをかける。
これならば、そちら系の人間に見えない事もなかった。
ビルのガラス戸を開け、階段からビルを上った。
当然のように、エレベーターなんて気の利いたものはない。
四階まで上がって、息が切れている事に気づく。
こんなに体が弱くてヒーロー気取りだなんて、なんだか嗤えた。
小指が震えている。ますます情けない。
今日は、緊張する事が多すぎて、もう限界の兆候が来ていた。
しかし帰るわけにはいかない。無心に考えをかき消して、四階のフロアの扉を開けた。
「何だてめぇは！」五人の男女が一斉にこちらを向いて小銃を構える。
「倉木さん……！」男が小銃を構えながら横目で島田さんに問いかけた。「知り合いか？」
「え、ええ。潜伏先の書店の主人よ」彼等は小銃を下ろした。「ほ

う。それで、何のようだ？」
僕は至って真顔で答えた。
「島田さんを連れて帰ろうと思って、ここに来たんだ」
リーダー格の男が馬鹿にするように笑った。
「連れて帰る？　貴方は、思い違いをしている。彼女は自分の意思でここにいるんだ。悪いけど、バイトなら他所で探してくれ」
男がそう言うと周りの男女も笑った。島田さんだけ居づらそうに顔を伏せていた。
僕は逆に挑発するように冷笑を浮かべた。
「誰がバイトを探してると言った？　うけを狙って勝手に想像するんじゃない。
バイトなら誰でも良いんだ。俺は島田さんがこんな遊びみたいな活動で死んで欲しくないから連れ戻しに来たんだ」
一気に男の顔が気色ばむ。どんな危機的状況でもビックマウスを維持できるのは私の取り柄でもあり、短所でもあった。
別の男が威圧するように言う。「とっとと失せろ。いま騒ぎは起したくねぇ…」
「こっちも怖いから帰るってわけには行かないんだよね。何が、俺が言いたいかと言うと、死んで欲しくないんだ。
もうすぐ……」言いかけて、息を呑む。これを言えば、友人を裏切る。これを言えば、僕も同罪。だから、躊躇した。
しかし、島田さんを助けて彼等を助けない理由はなんだ？　そこにどんな差がある？
そう思うと案外、次の言葉を開くのに時間はかからなかった。
「もうすぐ反体制派の一斉検挙が始まる。十月二十日。西宮ビルの幹部会で」
男が目を見開いて叫んだ。「何だと！　本当か！？」
「……ああ。これは黙ってようと思ったんだが、言ってしまったから仕方が無い。
目的は変わった。君達は君達で逃げなさい。僕も消える」

「待て！　その話は本当なのか？　なぜあんたがそれを知っているんだ！」
「彼は県の議員と友人なのよ。恐らく、その人から聞いたんだと思う」そのやりとりを横目で見て出て行こうとした。
「待って！　倉木さん。貴方も一緒に、」「遠慮しておく。一人のほうが、逃げやすい」
リーダー格の男が「さっきはすまなかった。教えてくれてありがとう。貴方は恩人だ」と言った。
それも無視して、部屋を出て行った。
これで僕も第一級の犯罪者だ。逃げる算段はまったく無いが、まぁやれるところまでやってみよう。
良い事をしたのか、悪い事をしたのか、その判断もつかなかったが、助かる人もいるという事実で、幾分か救われた。
これから先を考えると、潰されそうな程の重圧が圧し掛かる。
ならば考えなければいい。
今やるべきことだけ考えて、その重圧を頭から消した。
「待って倉木さん！　これからどこに行く気ですか！」
「……従弟は君が連れて行け。僕が連れてってももう助けてやれない。書店に電話して、待ち合わせをしておくんだ」
「貴方は、どうするんですか？」
「逃げるって言ったろう。頼るツテなら幾らでもある」
「嘘。倉木さん友達いないじゃないですか」……鋭いところをついてくる。
「君が知らないだけでいるんだ。これでお別れだ。じゃあな」
「倉木さんは、川田さんから情報を聞いて私を連れ戻しに来たんですよね？
川田さんの手前他言はしないで、私だけ連れて戻ろうとしたんですよね？
でも喋っちゃったから、迷惑になるから一人で逃げようとしてるんですよね？」

「……もういいだろ。話は終わりだ」
階段を下るが、彼女は戻ろうとせずに付いて来た。
「他人を助けて自分は助けを求めない。それが貴方の美学ですか？」
「……」無視してそのままビルを出たが、まだついてきた。
「かっこつけたまま帰るなんて許せないな……。私は貴方を恨んでるんです…。いつも酷い扱いを受けて、とても傷つきました。
貴方と打ち解けようと努力したのに…。だから、腹も立ったし、苦手でした……でも好きになっちゃったから、私にとって、とても厄介な人でした」
「島田さん。もう戻るんだ。僕はこれからタクシーで駅に向かうから。もう会うことはないが、元気でな。
君はとても良い子だ。君なら幾らでもやり直せる。
少なくとも忍耐強さだけは、保障する」
そう彼女に言うと、泣いて顔を伏せてしまった。
彼女の肩を軽く二回叩いて、一瞬止まったあと、前に振り返って歩き出した。
後ろから嗚咽が聞こえた。
タクシーを拾い、座席に座ると、どっと疲れが押し寄せた。
とても、疲れた。とても、眠い。
もう何も考えたくない。
別れの余韻だけが残り、その余韻に浸ったまま、眠りについた。

おしまい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1070n/

厄介な人

2010年11月24日08時58分発行